

清元 保名

1818年3月江戸都座で三世尾上菊五郎が七変化を四季に担当した「深山桜及兼樹振（みやまのはなとどかねえだぶり）」を踊り分けましたが、この中で清元「小袖物狂い」（「保名」）が最も好評で、現在はこの曲だけが残っています。保名は義太夫節の「芦屋道満大内鑑（あしやどうまんおおうちかがみ）」の一部を脚色したものです。阿倍保名は天文博士加茂保憲の門人でしたが、保憲は秘伝書を保名に与え、養女榊の前の婿にしようと思っただけでしたが、それを果たさぬうちに死んでしまいました。その後、たくらみにあい、榊の前は自殺してしまいます。彼女を愛していた保名は気が狂い、彼女の小袖を抱いて狂いさまようのでした。

恋よ恋 われ中空になすな恋 かたしく袖の片思い 姿もいつか乱れ髪 誰が取り上げて言うことも 菜種の畑に狂う蝶 翼交わし羨まし 野辺の陽炎春草を 素奥袴に踏みしだき 狂い狂いて来たりける 「何じゃ 恋人がそこへ行た おおどれどれどれ ええ又嘘言うか わっけもないこと言うわいやい」あれ あれを今宮の 来山翁が筆ずさみ 土人形の色娘 高根の花や折ることも 泣いた顔

せず腹立てず 愒気もせねばおとなしう あらうつつなの妹背中
主は忘れてござんしょう しかも去年の桜時 植えて初日の初会か
ら 逢うての後は一日も 便り聞かねば気も済まず うつらうつら
と夜を明かし 昼寝ぬほどに想いつめ たまに逢う夜の嬉しさに
酒事止めて語る夜は いつよりも つい明けやすく 去のう去なさ
ぬ口説さえ 月夜鳥に騙されて いっそ流して居続けは 日の出る
迄もそれなりに 寝ようとすれど寝いられねば 寝ぬを恨みの旅の
空 夜さの泊まりはどこが泊まりぞ 草を敷寝の肘枕ひじまくら
一人明かすぞ悲しけれ悲しけれ 葉越しの葉ごしの幕の内 昔恋し
き佛や 移り香や その面影に露ばかり 似た人あらば教えてと
振の小袖を身に添えて 狂い乱れて伏し沈む